

複雑な情報社会における批判的思考

家瀬 淳一

(Journal of I-LISS Japan 編集委員：監事)

2022年2月24日に始まったロシアのウクライナ侵攻が長期化の様相を呈してきた。ロシアが旧ソ連の亡霊を引きずったまま、そして、旧 KGB の影を背負ったプーチン大統領の独断によって。民主主義が進んだこの現代社会において、このような非人道的な行為、侵略戦争を起こすとは、心ある誰もが予想しなかったのではないだろうか。独裁を作り出す政治体制は、どこかに仕組みの矛盾がある。私たち人間は、長期政権の弊害を知っている。しかし、権力に取り憑かれてしまうと、そのなれの果て、奈落を視認せず、何度も同じ過ちを繰り返す。

プロパガンダという言葉が、こうした戦争の中で思い出したかのように叫ばれる。W. リップマン (Walter Lippmann 1889–1974) は、合衆国政府広報委員長を務めた G. クリール (George Creel 1876–1941) の言を借りて、第一次大戦時のアメリカ政府による政治宣伝に言及している。当時、クリールは、ステークホルダーの協力で、ポスターや多数の講演などを通して、世論を形成しようとしていた。それに対してリップマンは「ほぼ同じ形をした一連の観念を、一国のあまねく全国民に速やかに伝える組織的事業として、大きさでも強さでも、おそらくこれは極めつけであろう。(中略) 政府はこの時期に、全米にわたってほとんど一つの世論と呼んでもよいようなものを作り出そうと努力していた。」(『世論』掛川トミ子訳、岩波書店、1987、上巻、p.68–69) と述べている。ロシア国内において、国営テレビしか見ない高齢者層のロシア中心意識がマスコミ等を賑わせたのもプーチンのした世論操作によるのではないだろうか。

このように、情報は何らかのバイアスがかかっていると考えるべきである。多様なメディアの属性も同じく理解しておく必要がある。例えば、ステレオタイプ、認知バイアス、フィルターバブル、サイバーカスケードなど、そうした情報を取り巻く基礎的な知識を、批判的思考のために、私たちは身につけておかなければならない。

2022年5月、日米豪印4カ国(クアッド)首脳会合が東京で開催された。我々の研究会 I-LISS が本部を据えるインドにおいては、対ロシア、対中国との関係性を維持しつつ、「インド太平洋海洋イニシアティブ」を踏まえた、この会議への思惑が垣間見える。この会議で、インドとしては、アメリカの軍事的影響力を避けつつ、非軍事的な枠組みでの経済協力体制の構築で一定の成果があったのではないだろうか。資本主義社会の現状は、2022年 GDP のランキングとして2位の中国と5位のインドを抜きにしては考えられない。地政学的な政治、経済、軍事の枠組みが変わりつつある。

政治経済面では、こうした複雑な利害の思惑がある中で、I-LISS Japan は、図書館情報学という学術コミュニケーションの枠組みで、インドを含め、関係国と図書館情報学の発展を目指した友好的な関係を築いてきた。I-LISS Japan では、インドで開催される2022年度の I-LISS 国際会議に研究発表(5名の共同研究)の原稿を投稿している。今大会における国際平和的成果に期待したい。